

武蔵野日曜集会

真の礼拝

――ヨハネ伝第4章20～38節――

1984年3月18日(武蔵野)

小池辰雄

ゲリジムがエルサレムか 我に任せよ 此の山でもエルサレムでもない 御霊にあつてアーム
ンの現実で祈れ 霊無をもって祈れ 我はそれなり 来りて見よ 是わが食物なり 随所是神
殿なり さあ遊ぼうよ 自分からぬけているのが自由

【ヨハネ4・20～38】

17 女こたえて言う『われに夫なし』イエス言い給う『夫なしというは宜なり、
18 夫は五人までありしが、今ある者は、なんじの夫にあらず。無しと云える
は真なり』19 女いう『主よ、我なんじを預言者とみとむ。20 我らの先祖たち
は此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』21 イ
エス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムに
もあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22 汝らは知らぬ者を拝し、我らは
知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。23 されど真の礼拝者の、霊
と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝す
る者を求めたもう。24 神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』
25 女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、諸般
のことを我らに告げん』26 イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

27 時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給
うか、何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。28 ここに女その水瓶を遺
しおき、町にゆきて人々にいう、29 「来りて見よ、わが為しし事をことごと
く我に告げし人を。この人、或はキリストならんか」30 人々町を出でてイエ
スの許にゆく。31 この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』32 イエス
言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』33 弟子たち互にいう『た
れか食する物を持ち来りしか』34 イエス言い給う『われを遣し給える者の御意
を行い、その御業をなし遂ぐるは、是わが食物なり。35 なんじら収穫時の来
るには、なお四月ありと言わずや。我なんじらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、
はや黄みて収穫時になれり。36 刈る者は、価を受けて永遠の生命の実を集む。
播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。37 俚諺に彼は播き、此は刈るとい



るは、斯^{ここ}において真^{まこと}なり。38 我^{われ}なんじらを遣^{おこ}して勞せざりしものを刈らしむ。
他の人々さきに勞し、汝^{なん}らはその勞を収むるなり』

●ゲリジムかエルサレムか

サマリヤの女は、

「主よ、我^{われ}なんじを預言者とみとむ」

と。自分の素性をすっかり言われてしまったものだから、びっくりしてしまった。キリストには現在も過去も未来も見えるから。大変なひとです。これは本当の永遠者ですね。20節で、

20 我らの先祖たちは此の山にて拝したるに、汝らは拝すべき処をエルサレムなりと言う』

サマリヤの女は急に話題を変えまして、礼拝のことなんかを言い出した。なぜそんなように変えたのか、学者がいろいろなことを想像するけれども。要するに、サマリヤ人はゲリジムで礼拝する。ところが、南の方のユダヤ人はエルサレムでなければダメだと言う。「拝すべき」のこの「べき」という言葉は強くて、エルサレムでなければダメだというような「べき」なんです。

「そういうようにあなた方は言っているけれども」

と言って、ゲリジムかエルサレムかという本山の争いみたいなものです。

仏教でいうと、清澄山か比叡山かなんていうようなわけです。高野山もあるし、いろいろ山がありますが。宗教というのはどうもそういった本山を作ったがるわけです。ユダヤ人にはまさにこのエルサレムです。こちらでいうと、仏教は、一番中心は比叡山でしょうね。いろんな僧侶がたいてい比叡山参りはしているから。

「あなたは預言者だけれども、どうでしょうか」

と。そうすると、キリストの答えはそういった相対的なことではない。「あそこだ、ここだ」というのでは、

「イスラエルに、聖地に行かなければ聖書は分らない」

なんていうのと同じようなことになってしまう。それは行けば、それだけのことはあるけれども。我々もイスラエル旅行をして来ました。それはしかし、どこまでも相対的な意味です。キリストの現実はその相対をもうひとつ乗り越えたところですよ。相対をただ悪いと言うのではないけれども。相対にとどまっているうちはいつまでたつても始まらないというわけです。

「カトリックだ、プロテスタントだ。教会だ、無教会だ」

なんてね。無教会の人がいつも教会と対立しているうちはダメなんです。だから、私は無教会から出てしまった。また、出されもした。内村先生も単に相対的な無教会を仰つてな



いから、

「君たちの言うような無教会ではないぞ」

というようなことも言われた。内村先生はでつかいですからね。無教会は観念的にはそういうことも、ある意味においては分かっているが、無教会という殻の中に閉じこもってしまう。だから、パリサイになる。

●我に任せよ

21 イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、

これは原文では、「言うことを」なんて書いてない。

「女よ、我を信ぜよ」

と書いてある。ギリシア語の言い方は、「我に」というような三格的な言い方をしているものだから、塚本先生が、「…に信ずる」というようなことを言われたことがある。そうすると、あとで無教会の人はみんな、「に信ずる」というようなことを言っている。日本語としては、「に信ずる」というのはちよつと語呂が、概念的にあまりピンとこないけれども。「に」ときたら、「に信頼する」とむしろ言いたい。「我に任せよ」と。「任せる」ということが本当は「信ずる」ということですよ。を」というと対象的になるから、ただ対象的に事柄を信ずるのではない、という気持ちが塚本先生にあつたから、「に」と言われたんでしょうけれども。そう言われても、果たして受けとっている人が徹底したかということはいふ問題です。

キリストに任せよ、全託せよと。全託するということは、こちら側にただ坐っていて、「に任せて」いい気になっているという、そんな意味の「に任せる」ではないですよ、「に任せる」ということは。全身をそれに任せる、全存在をそれに任せるということは、私に言わせると、「に自分を投入せよ」ということになる。

「キリストに投げ身せよ」

と。投入でも、投身でもいい。これが「に信ずる」なんです、もし「に」と言うならば。「信ずる」という言葉はまさにそういう、離すことのできない内在関係です。こちら側に遠くにいて、「に任せて」いいようにしてください、なんていうのではない。これは自分がその中に入っていないと。それが「任せる」ということの本当の意味です。

だから、一つにならなければ、キリストと一、如にならなければ、「任せる」という意味の本当の内容でなくなってくる。ズレをきたす。一つになったら、必ず力が来ますから。ええ。キリストの言葉にも、キリストの行為にも全部、自分を任せる。「信仰」という言葉が非常に躓きになる。信じ仰いでばかりいる。言葉というのは妙なものでね。いつも新しい概念をそこから創造していかなければダメなんです。

「女よ、私に全託せよ」

ということ。まあ、この場合は、わかりやすく、「わが言うことを信ぜよ」なんて訳したけ



れども、意識になってしまった。口語訳でも「わたしの言うことを」と訳しているが、「言うことを」なんて書いてない。

「我に信頼せよ」

と。もつとも、キリストはギリシア語をしゃべったわけではないから、これは困るんだよ、本当は。キリストはアラミ語なんだけれども、アラミ語の聖書というのがないので困ってしまうんだ。

●此の山でもエルサレムでもない

此の山にもエルサレムにもあらず、

「此の山でもエルサレムでもない」と、両方否定してしまった。どっちかであるかと思つたら、どっちでもない。

汝ら父を拝する時きたるなり。²² 汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、

救はユダヤ人より出づればなり。

「我らは」と言つて、キリストはちよつとここで次元をおろされましたけれども。「我は」でいい。「我らは」なんて言つたつて、本当にキリストと同じように拝しているのはいないから。

「救はユダヤ人から出づる」

というのはイザヤ書2章から出ている言葉だけれども。ユダヤ人から出たから、ユダヤ人は素晴らしいかという、そういう意味ではない。神さまは、その時その時に適当な人をお使いになるだけのはなしです。

比叡山でもなければ、清澄山でも高野山でもない。「どこでもない」ということは逆に、

「どこでもある」ということになる。

「人の子は枕する所なし」

という。そのキリストは至る所を枕にしていた。「無い」ということは実に自由自在になるんです。相対的に「有る」ということは常に限定する。人間は相対的な存在で、限定された存在です。我々は日本人です、ドイツ人ではない。ただ、人間ということにおいて世界共通です。だから、人間ということでは世界共通なその場に立てば平和は来るのに、やれ何だかんだとイデオロギーをかざすから、イデオロギーではいつまでたつても平和はこない。宗教だつてそうですよ。仏教だ、キリスト教だ、イスラム教だ、「それでなければダメだ」なんていうことをやっているから、いつまでたつても始まらない。イスラム教でありながら、仏教でありながら、キリスト教でありながら、そいつを乗り越えたところに入らなければ、それが本当の仏教であり、本当のキリスト教なんです。

偉大な文学もそうです。まさに漱石は日本の文学です。でありながら、それを乗り越えているから、世界的なものを持つている。ゲーテにしろ、ダンテにしろ、ドストエフスキーにしろ、みなそうです。それぞれの素晴らしい在り方を持ちながら、それを突き抜けてい



るからね。そこが相対、絶対という世界です。

「ああ、ゲリジムか、いいよ。エルサレムか、いいよ。野原か、いいよ。どこでも結構だよ」

と。キリストが言いたいのはそこなんです。ゲリジムやエルサレムをただ相対的に否定しているのではない。

「あなた方は、ゲリジムなら、ゲリジムでもいいよ。こっちはエルサレムなら、エルサレムでもいい。ただし、ゲリジムに執したり、エルサレムに執するから、それはダメだ。そういう意味では、ゲリジムでもエルサレムでもない」

と。これがキリストの本当の心です。

「どこでも結構だ。どこの教会でも結構、無教会でも結構。ただし、そこに本当の礼拝があるか、ということだけが問題だ」

と。今日は「真の礼拝」と題したけれども。

●御霊にあつてアーメンの現実で祈れ

²³されど真の礼拝者の、^{まこと}霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父は斯のごとく拝する者を求めたもう。

「今すでに来ている」と。なぜ、今すでに来ているんですか。キリストという真の礼拝者がいるから、今来ている。「霊と真」、これはヘブライ語でいうと、「ルーアツハとエメツ」。「真」という字はもともと「アーメン」という字です。霊とアーメンとをもつて。ギリシア語は「アレティア」ですね。「プニユーマとアレティア」。「霊と真の中で、において」と書いてある。「をもつて」ではないんだ。

「霊において、真において、まことの中で」ということ。そのあとで、

「神は霊なれば」

と書いてある。「プニユーマ・ホ・テオス」という。「霊である」の「である」という字も何もない。「霊、神」と、非常に強い言い方をしている。

「霊でこそある、神は」

という気持です。

「主は御霊なり」

という言葉。パウロは言いました。キリストは霊であるぞと。神は霊である。この霊は、我々でいうと、御霊です。ただ漠然と霊と言っているのではない。「霊と真をもつて」というのは、

「御霊にあつて、神にあつて、真にあつて」

と、ヘブライ語でもそういう言い方をしています。「の中で、即して」という「ヴェ」という字を使つてある。「霊に即して、霊にあつて」です。ここはそう言つたつて、キリストが



聖霊をくだすまでは、キリストのこの言葉は分からないですよ。いくらサマリヤの女が聞いてたつて、分かりつこない。パウロが、

「**霊において祈れ、心において祈れ**」

と、コリント後書かどこかで言っていた。霊に於いて祈り、御霊にあつて祈り、心で祈る。「霊において祈る」とは異言的な祈りです。この場合の「霊」というのは人間の霊ではないです。だから、これは「御霊」と言わなくてはダメです。「御霊にあつて」です。「霊と真をもつて」というのは、何か霊的というような気持ではない。「御霊にあつて」と、ハッキリ言った方がいい。

「真^{まこと}にあつて」の「真」「エメツ」は「アーメン」という字からきている。「アーメンの現実で」ということだ。「アーメンの現実」とはどういうことですか。

「**アブラハム、エホバを信ず**」

あの「信ず」がそうです。

「**アブラハムはエホバに対してアーメンと言いました**」

ということですが、「信ずる」という字は。

「**エホバはこれを彼の義となした**」

という。この創世記15章は大変なところです。あれをパウロが持つてきて、パウロの信仰はあそこから来ているんです。

「**信仰によって義とされる**」

というのはこれなんです。

「**アブラハムは神に「然り」と言ったら、彼は義を賜った**」

という。これが「信仰によって義とされる」ということで、プロテスタントの信仰の金科玉条の言葉だ。「信仰義認」とか何とか言つてね。

ところが、この信仰が、神さまを「然り、アーメン」と言うときには、自分に対しては「否」と言わなくては。自分に対しても「然り」なんて思ったらダメなんだ。神さまはプラスで、こっちはマイナスなんです。

「**自分の意^いではありません。あなたの御意^{みこころ}です**」

と、キリストが言っているじゃないですか。

「**御意を成させたまえ。私の意ではありません**」

と。「御意を成させたまえ」というのがこの「信ずる」ということ。ちやうどその反対の、「私の意ではありません」というのがそういうなんです。わが意志を否定してかかる。こっち(神さま)が絶対の有で、こっち(我)は絶対の無なんです。「然^{しか}り」と「否^{いな}」なんだ。

●**霊無をもつて祈れ**

「**御霊とアーメンとをもつて祈れ、拝せよ**」



と。ということは、本当に御霊にあれば、それは「然り」と言わざるをえないし、自分の側は「否」であり無である。だから、「霊と真」ということは本当は一つなんです。私に言わせると、

「霊、無をもつて祈れ」

と言いたい。「霊無」なんていう言葉は今日初めて言うよ。こんな言葉はないよ。こちらが完全に碎けていなければダメです。破れ、碎けます。

真と言うと、「自分の真実」なんてことを思つて、

「人間も非常に真実でなければいかん」

なんて、心の真実なんてことを考えて――藤井先生がよく「真実」と言つたものだから――それがまた躓きになっている。

「真はキリストの他にない。我々は偽りだ」

と、パウロが言っているじゃないですか。「偽り」というのは「嘘つき」ということではないけれども。「まこと」というのは、偽りがいないこと、「あるがまま」ということ。我々のあるがままの姿は本当は破れであり、碎けであるんです。ところが、碎けていない。碎けていない傲慢な「あるがまま」では困るよ、そういう意味での「あるがまま」は。

こここのところの「まこと」「アーメン」ということは、「アーメンをもつて」ということは要するに、向こうにむかつて「アーメン」と言っているんだから、

「御霊にあつて、アーメンにあつて」

ということ。ところが、本当は一つのことを――「御霊」は実体的であり、「まこと」は性格的なんです――「アーメン」と叫ぶ。だから、「霊と真をもつて」ということは一つのことなんです。何か二段構えに考えてはダメですよ。

「御霊におけるところの無の現実で祈れ」

ということ。神さまを「然り」として祈れ、「然り」の実体は御霊である、霊である。神さまは霊である。

しかも、私たちはキリストで御霊をいただいているから、御霊にあつて、霊なる神に、霊なるキリストに祈るときは自分の側はゼロ、じゃないですか。自分の側は無、じゃないですか。自分自身は破れ、じゃないですか。本当の碎けを賜っている。これはみな十字架ですよ。祈りの世界は、自分の側をよしとして人のことをどうの言っているうちは、いつまでも始まらない。ヘタすると、この「霊と真」という二段構えの表現に躓く。

「霊無にあつて祈れ」

ということです。こんなことを言つたつて誰も分からないね、

「何を言っているか、小池は」

なんて。だから、私は一般に理解されない。

まあ、あんた、それでキリストの中に入つてごらん。凄いことになるから、この祈りの



世界は。本当に力が来てしまう。この「霊無」というのは、「霊は無だ」なんていうのではないよ。

「霊が、御霊が本当に動いているときには、こっちは無でございます」

ということ。それが「霊とまこと」という世界です。この「無」というのは、「アーメン」と言っている姿なんです。

「神さま、アーメン」

と言っている姿です。そうすると、この無を神さまは義となす。義ともするし、愛ともするし、もうこの無は無限無量の無にすぐ変わる。即無限無量の世界です、この無は。しかも、無限無量と言ったって質的な意味だから、その人のその人らしきの最もいいものがそこに創造されていく。創られていく。

²⁴神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』

「拝すべきなり」とは、拝さなければダメだと。この「べき」も強い。ギリシア語で「デイ」という字が使つてある。

「どこでもいいんだ。エルサレムであろうと、ゲリジムであろうと、ガリラヤ湖畔

であろうと、カルメルであろうと、どこだっていい」

と。すぐ、エルサレムだ、ゲリジムだなんて言うから、

「どつちでもないぞ」

とキリストが言われた。どつちでもないぞということとは、

「どこでもいいぞ」

ということなんだ。どこでも結構だ。どこでも直ちにと。だから、すぐ平伏しの姿です。

この頃、私は片手でずっと祈るくせがある。人の前ではあまりやらないが、何かあると、すぐ祈る。感謝の気持だね。人から手紙がきてもそうだよ。何かいただいても、全部、私はもう祈りの世界に入ってしまう。まあ80歳になつてやつとそんなところに到達したようなわけだ。あなた方は80まで待たなくていいから、どんどん素晴らしくなつてください。

あのね、こうやつてこの二つの字をじつと見ているでしょ。「霊」と「真」という字が一つになつてしまうんです、この活字が。「真」という字が「霊」の中へ入つてしまつて消えてしまう。それが本当の「真」の世界。これが「霊無をもつて祈れ」ということです。

「拝する者は霊無をもつて拝せよ」

と。そんな言葉は使わないでくださいよ。これは私だけが使いますから。

●我はそれなり

²⁵女いう『我はキリストと称うるメシヤの来ることを知る、彼きたらば、諸般^{もろもろ}のことを我らに告げん』

そういうことを聞いている。なかなかこのサマリヤの女はいろんなことを聞いているん



だ。バカじゃないらしい。

²⁶ イエス言い給う『なんじと語る我はそれなり』

「お前と話している私だよ」

と。「我はそれなり」と、これは時々出てきますね。

「我なり、汝に語っている者」

と。「お前に語っているこの私がそれだ」と。「それなり」の「それ」という字はない。直訳すると、「我なり」という。日本語でいうと、「私だよ」というのが一番いい。

「私がそれだよ」

という「それ」もいらない。「私だよ」と。

キリスト教とはどんなものかと、いろんなことを言って説明するね。要らないんだ。

「私だよ」

という。そう言えたら、これはもう最高の答えです。

「私はキリスト教の証者だよ」

ということですよ。何かしらんが、あれはちよつとちがうなと。それが「私だよ」という世界なんです。

²⁷ 時に弟子たち帰りきたりて、女と語り給うを怪しみたれど、何を求め給うか、

何故かれと語り給うかと問うもの誰もなし。

まあ、弟子たちの次元はそんなもんですよ。

「なぜ、語っているのか、何かあの女からもらおうとしているのか」

なんて。冗談じゃない。

²⁸ ここに女その水瓶を遺しおき、町にゆきて

「我はそれなり」と言われたので、正直びっくりしたんだ。もう水どころのさわぎではない。なにしろ、どこから汲んできたか、「渴かないような水を、活ける水を持っている」なんて、この人は言うし、私の素性は全部分かってしまうし、キリストは誰かと聞いたたら、「私だよ」なんて言われたものだから。畳みかけて、参ってしまったんだ、このサマリヤの女は。サマリヤの女ばかりではない。我々がサマリヤの女になったら、正にその通りなんだ。

聖書はドラマだから、自分がそのドラマの中に入って、自分がサマリヤの女になって、キリストにぶつかってごらん。ぶつ倒れなければ、驚嘆驚倒しなければ、キリストというひとは分からない。降参しなければ福音は分からないというのはそのことなんです。研究してこの意味はどうだこうだと、そんなことではない。全存在で驚嘆してぶつ倒れて、「私はもう自己義認なんてやめた。自分がどうだこうだなんてことはもう問題にしない」

というところに突き抜けなければ。そうしたら凄いことになりますから。



●来りて見よ

水瓶も水もどうでもいい。

人々にいう、²⁹「来りて見よ、

「来りて見よ」と。これまた大事な言葉です。こういう閃きの言葉をしっかりとつかまなければダメですよ。

「来てごらん」

と。あなた方は、一年に一人は、この集会に「来てごらん」とやらなければダメです。

「小池先生はいわゆるお説教なんかしているのではないぞ」

と。私は何か自分の主観でものを言っているのではないんだから。

「来りて見よ」

と。もう理屈ではない、来てごらんと。百聞は一見にしかずというわけです。

「この人にぶつかつたらぶつ倒れるぞ、そうしたらその世界に入れるぞ」

と。これが福音なんです。だから、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書を読んでキリストに――「読む」のではないよ、本当は――捕まれ、聞かされる。もうたまらんです。電車の中でもどこでも、あなた方、福音書を読んでごらん。一体、これは電車の中かと思いうくらいになってしまうから。聖書を破いて福音書をポケットの中に入れて、どこでも読む。それくらいのことをしなければダメだよ、青年は。また買ったらいよいよ、他の聖書を。パウロは、

「神の真理のためには狂えるなり」

というような魂であつたでしょ。我々はサマリヤの女と同じように、

「福音書の中に来りて見よ」

ということなんです。この福音書の中に来りて見て、

「一体、こういうことがあるだろうか、ないだろうか？」

なんて疑ってみたり、

「これは果たしてキリストの言葉だろうか？」

なんて学問的に研究したって何になるか。古典いじりは古典いじりの意味はあるだろうけれども、福音というものはそんなことではないんだ。無教会はエリートの学者が多いものだから、無教会はどうのこうのと研究する。大体、内村先生自身が非常に優秀な方だから、「聖書之研究」という雑誌でやって、研究教になつてしまった。なにも悪口を言うわけではないけれども、研究教ではダメなんです、身体で読まなくては。日蓮の方が本当だよ。

「身読せよ」

という。

「来りて見よ」

という一言がもの凄く響く。キリストに来りて見ないで何を見ているか。福音書の各頁に



絶対次元が展開している。相對界に在りながら絶対次元を展開したひとはキリストの他にいないんだ。

「神の国はやがて来る」

ではない。もう既にキリストの中に来ている。御国が来ているから、

「御国を来らせたまえ」

と祈れる。死人まで甦らせるようなひとですから。

●是わが食物なり

わが為しし事をことごとく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか』

まだ「あるいは」なんて言っている。そのまま書いてあるからおもしろいね。

「キリストかもしれない」

なんて。よほど疑い深いやつだ。「まあ、来てごらん」くらいだな、このサマリヤの女は。私の方がもつと深く読んでいるんだけど。

「とにかく、まあ来てごらん。キリストかもしれないよ」

なんて。正直、驚いている。驚きながら、まだ自分の本来のサマリヤの女らしさが出ているから、そういった矛盾的な言葉なんだ。

「あるいはキリストならんか」

なんて。ちつともキリストを信じてはいない。

30 人々町を出でてイエスの許にゆく。31 この間に弟子たち請いて言う『ラビ、食し給え』

どうぞ、せつかく買ってきましたから、おあがりくださいと。

32 イエス言いたもう『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』

何でしょうか、というわけだね。

33 弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』

まあこういう会話なんだ。いつも次元が違うものだから。

「お前たちの知らない食物がある」

なんて、一体どうしたんだ、誰が持ってきたのか、サマリヤの女か、なんて思っている。

34 イエス言い給う『われを遣し給える者の御意を行い、その御業をなし遂ぐ

るは、是わが食物なり。

まあこんなことを言えるひとはいませんですよ。業をするとお金がもうかるから、それから食べ物になるなんていう、そんな三段論法の考えではないよ。普通の人はそう思うだろうけれども。神の生命がキリストの中に溢れますから、その力が業となつて展開する。神さまの水を飲み、神さまの食物を食べているんです、キリストは業において。神の力が来ると、神さまを食べているわけだ、キリストは。「是わが食物なり」と。



「我を食らい、我を飲め」

とキリストは言われたでしょ。キリストと本当に一つになると、キリストを飲みキリストを食らうことになる。

「キリストを信ずること、これわが食物なり。キリストにあつて何かやっていること、これわが食物なり」

と。「武士は食わねど高楊枝^{ようじ}」なんていうけれども、キリストを食べていると、霊が、生命が満ちてますから、一食や二食ご飯なんか食べなくなつて何ということはないと、こういうわけです。

「集会のあとではご飯は要りません。もう私は御霊の食物で一杯です。しばらくたないといご飯は食べたくない」

なんてなわけだ。それは本当に福音を受けとつている気持ですよ。全身が熱くなるから温泉に入つてたようだ。これわが温泉なりと。

●随所是神殿なり

話はちよつと戻りますけれども、「真の礼拝」ということ。至る所、随所是神殿なりということ。どこであつても、そこが神殿です。キリストは神殿を神殿としました。けれども、「神殿でなければならぬ」なんて絶対にキリストは仰らない。神殿でもつて商売なんかするから、ひっくり返してしまつた。

「父の家なり」

と。けれども、キリストは神殿を、

「いや、こんなものはそのうちに壊されてしまふ。けれども私は三日で建てる」

と言われた。それでまたみんな蹟いた。彼自身が活ける神殿だから。即ち、十字架を通つて復活したキリストは活ける神殿だからね。

随所是神殿ということとはもうひとつ、今言つたように自分自身が即ち神殿なんです。至る所これ神殿である。

「御霊の宮である」

というようなことをパウロも言つた。我々自身がキリストにある活ける神殿である。活ける神殿の中には何がありますか、何かお像がありますか。そうじゃありません。御霊がある。活ける神殿の中心には聖霊がある。御霊のキリストがある。あるいは、キリストの御霊がござる。これが、

「内なるものに対する畏敬の念」

と言うんです。ゲートルが「最後の宗教はそこだ」ということを言つた。さすがはゲートルだ。『ヴイルヘルムマイスター』の「ヴァンデレーヤーレ」(遍歴時代)の終りの方に書いてある。あ

のときゲートルはハッキリ、聖霊だとは言わなかつたけれども。



「天上天下唯我独尊」

あの「唯我」の「我」はそのような我、宇宙我、凡我^{ほんが}なんです。凡我だけが尊い。御霊の我だけが尊い。それが、「我を見よ」の「我」なんです。

「来りて見よ、あの人を見ろ。そこに本当の神殿がある」

と。どこでも本当に平伏して、「南無妙法蓮華経」、「南無阿弥陀仏」、「南無キリスト」を心の中で称えるところは、それが礼拝です。人間がどう思おうがどうされようが、一向に差し支えない。私はこの頃、全然そういうことが問題でなくなってしまった。あの『エン・クリスト』17号は私の決定的な告白ですよ。しっかりと読んでください。

●さあ遊ぼうよ

シラーの「遊び」という言葉がある。シラーという人は非常に努力精進の人だったけれども、「人間の最後の境地は遊びだ」

と言う。これは老子の無道の道のような境地なんです。遊びの境地に入って、いわゆる努力をもうひとつ突き抜けてしまつて、やるのが楽しい。楽しいということです、この遊びというのは。やるのが遊びのように楽しい境地が本当の人間の境地だ。勉強なんて言っているうちはダメだと。何をやっていても、それが遊びのごとく楽しくなる。それが本当の人間らしいところだと言う。

人間は遊びが好きだものな。学校が休みにれば、みんな喜んでしまふし。何と言ったって、小さい子供は、

「さあ遊ぼうよ」

と言う。「さあ遊ぼう」というあの小さい子供の境地が死にいたるまで、やるのが全部「さあ遊ぼう」であれば素晴らしいということなんです。やるのが全部楽しい。どんな苦しいこともそこにおいて遊びの境地をつかまえば大したものだ。

シラーというあの努力家が理念的にそこに到達していることは素晴らしい。芸術も最後は無目的の世界に入らないと、いわゆる目的を持つているうちはまだダメなんです。あるがままで、そして目的が自然にその中におのずから開示しているような世界です。

そうしたら、どんなに忙しくても——私は正直、大変ですよ、これから15年間。けれども、「ああ大変だ」と思ったらダメです——この遊びの境地でやらないと。

「動中の静、静中の動」

という。あせつたらダメなんです。皆さん、みんなそうです。いろんなことがありますても決して——「忙しい」という言葉は時には人間は使うけれども——あの「忙しい」なんていうのはあまりよくない。心が亡くなってしまう。



●自分からぬけているのが自由

「是わが食物なり」

と。キリストは神さまの力で何かをやっているのが食べ物だと言う。伝道もこれ遊びなんです、私も。皆さんもどうぞ、人に道を伝えてくださいよ、楽しいから。

「来りて見よ。何でもいいから来て見ろ。ばかされたと思って来なさい」

と。私は一回といえどもいい加減に集会をしてませんからね。

³⁵ なんじら^{かりいれどき}収穫時の来るには、^{よつき}なお四月ありと言わずや。我なんじらに告ぐ、目をあげて畑を見よ、はや^{きば}黄みて収穫時になれり。

向こうは刈り入れ時は春が刈り入れで、播くのは秋ですから。

³⁶ 刈る者は、³⁶ 価を受けて永遠の生命の実を集む。播く者と刈る者とともに喜ばん為なり。

「播く者」とはキリストです。キリストは種を播いて、そして弟子たちがそれを刈り取る。どっちもうれしいんだと。キリストはこの福音という驚くべき種を播いてくださったんだからね。我々はこれによつて人を刈り取らなくてはいかん。果を結ぶようにしてね。そういうことです。

ヨハネ伝ではよく「永遠の生命」というのが出てくる。

「永遠の生命をいただきました。終り」

ではないですよ。永遠の生命をいただいたら、必ず永遠の生命を隣人に分かち与えなければ、そのいただいた永遠の生命は腐ってしまう。すべて私したら全部ダメになってしまう、どんないいものも。人に与えていかなくては。

すべてのものは神のものなんだ。神有^{しんゆう}なんだ。善用しなくては。福音のためにどしどし善用しなくては。そうすると、その人は本当の意味で豊かになる。無一物無尽蔵ということになる。有れどもなきが如く、なけれども有るが如しという世界になる。だから、

「一切の秘訣を得たり」

とパウロは言っている。

凄^{しみ}い弟子だよ、パウロの書簡を見ているとね。まあパウロがいるから――キリストはあまり次元が高いものですから、どうにもならない――そこへ持っていくのがパウロだ。ものの凄い構造を持っている。しかし、この次元の高いキリストに、パウロを通らなくては行けないのではない。いろんな学問があったり、いろんなやつはみんなパウロにすれば、パウロにかなわないことが分かる。

しかし、この次元の高いキリストは無条件の世界だから、誰でもが入れるんです。どんな人でも無条件に入れる。条件を自分でつけるから入れないんです。無条件になれば入れる。無条件に実は十字架がしているんだ。無条件の世界を開いている。

³⁷ 俚諺^{ことわざ}に彼は播き、^{これ}此は刈るといえるは、^{まこと}斯において真なり。³⁸ 我なんじら



を遣^{つか}して勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を収^{つか}むるなり』

何といつても、人間の中心は魂ですからね。魂がキリストにぶつかって、「ああうれしい」と。それを見ることほどうれしいことはない。その人の全存在が明るくなつて変わっていく。病氣なんかどこかへ行つてしまふ。

それが、楽しいのはその遊びの境地なんです。ドイツ語を勉強するのも、医学を勉強するのも、全部これは遊びだよ。あのシラーのところを読んでください。この遊びの世界が本当の自由なんです。自由と愛とは離すことができない。身勝手な自由ではないですよ、これは。自分からぬけているのが自由という。自分からぬけている人は本当に人を愛するわけです。何とかしてこの永遠の生命を与えようという。

そういうことで、真の礼拝者は、どこでもこれ神殿であります。そして、私たちは日曜毎に火の出るような集会をしながら、この曠野の旅を進んでいく。八十の峠を越えて私はどんどん山を登っていくから。山の頂きにいたら、ダンテじゃないが、天界へ往つてしまふ。まあおもしろいね、ダンテとゲーテというのは。この二人の詩人が、私には二つの非常に大事な要素を持っている。だから非常におもしろい。とにかく、皆さん、このキリストの直弟子の次元にグングン入ってくださいよ。まちがいなし。本当に楽しいよ。遊びになる。どんな苦しみにあつてもニコニコしている。そういった突き抜けた人間になる。おしまい。

